

書評

〔評者〕
齋藤輝信

国立病院機構仙台西多賀病
院 リウマチ疾患研究セン
ター長
(前 東京女子医科大学附属
膠原病リウマチ痛風センタ
ー教授)



軸性脊椎関節炎—診断からリハビリ・患者指導まで 浦野房三 著

●B5判 頁112 2014年
定価：本体3,500円＋税
[ISBN978-4-88002-748-7]新興医学出版社刊

この度は、著者のライフワークである付着部炎そして脊椎関節炎に関する膨大な研究成果のなかから、本書を纏められたことに對し、改めて敬意を表します。

そのなかで、本領域の分野が欧米諸国と比べて著しく立ち遅れていることを懸念し、その要因として医学教育の在り方に着目しておられます。これはきわめて重要な指摘であります。私の現職中を振り返りますと、限られた時間内にリウマチ学全般を講義するため、広く浅くなりがちですし、興味ある疾患にのみ時間を割くと、そのぶん他は浅くなるか、割愛せざるをえない現実がありました。しかし、いずれにしても軸性脊椎関節炎(当時は強直性脊椎炎)をはずした講義が許されるはずがないことは明白です。

次に著者が強調していることは、関節リウマチ(RA)を診察する際、一方では付着部炎由来の関節症状ではないか、と常に脊椎関節炎をも念頭に置きつつ診断確定することを最重要視しています。すなわち、それだけ付着部炎、脊椎関節炎が多い疾患にも関わらず、これまでは竹状脊椎(bamboo spine)、HLA-27陽性を呈してはじめて強直性脊椎炎と診断されてきた経緯があるためです。その背景には、本邦の疫学調査上、脊椎関節炎はきわめて稀な疾患とされてきたことに對し、著者は本書を発刊することで、その実態を理解していただきたいというメッセージさえ感じられます。

さらに著者は、軸性脊椎関節炎の早期診断の重要性を強調し、早期発見がその後の薬物療法、特に生物学的製剤、リハビリテーションなどの有用性の増幅に直結し、経過は現在よりもはるかに良い方向に期待を寄せています。

最後に付録として、脊椎関節炎のなかで特徴的な皮膚・関節罹患を呈する乾癬性関節炎を取り上げ、診断に当たって問診の重要性、RAとの鑑別点など著者らしい解説を加えている点は、本書に重みを加えています。

また、著者は脊椎関節炎領域の研究面においても、欧米との格差がますます開いてきている現状を憂いていることは、専門家の発言だけにきわめて重く受け止めています。その即効療法などは、もとよりあろうはずがなく、まずは医学生、研修医、若手医師の士気を高める環境整備、専門医の育成と指導体制整備など課題は多いと思われますが、最終的には本人自身がいかに食欲に、あらゆる研鑽の場を活用して、自分自身を研ぎ澄ましていくかしか方法はない分野なのでしょう。その意味では、著者の施設に留学して研鑽を積むのが最良・最短の方法であり、できれば私自身が留学させていただきたいぐらいであります。

最後に、本症の権威である著者の今後のますますのご活躍・ご発展を祈りつつ書評にかえさせていただきます。